

EurekaXIV

六年制通信 No.8 令和8年5月28日(木)号

花弄

最近また映画「二百三高地」を観て明治のころ、さらにさかのぼって幕末から明治をつくった人々のことを考えていました。司馬遼太郎が『坂の上の雲』などで乃木希典大将に凡将とか愚将といったイメージをつけすぎていると思いますね、私は。乃木さんは昭和の陛下の教育係に任命されたわけですから明治天皇の信頼は誰よりも厚かったはずです。立派な人格者だったことは間違いないと思います。明治天皇の大喪の日に妻ともども殉死をするわけですが、それを古い、野蛮だと笑う文士たちのいる中で漱石は『ころ』を鴎外は『興津弥五右衛門の遺書』を書き、彼の死を擁護します。

映画の中で乃木さんの息子が戦死するシーンがあります。男の子を二人とも失うのですが、戦死の報を聞くとランプを消し暗い部屋に一人悲しみに耐える姿が描かれます。軍刀が小刻みに震えるシーンが心に残ります。ああいう日本人、今、いますかね。あれ、演じていたのは仲代達矢でしたな、凄い役者さんです。

ちょっと話がずれました。今回は乃木さんの話ではなくて、劣等感の話をしようと思っていたのでした。私は、劣等感を持つことは、優越感を持って自分の進歩を止めてしまうよりよほどいいのではないかと思います。嫉妬はいけませんよ。劣等感と嫉妬は違います。嫉妬は呪いに通じ自分の身を滅ぼしますが、劣等感は考えようによれば自分を成長させるバネになります。向上心と劣等感とは表裏一体ですね。

それで、幕末から明治にかけての話になるのですが、君たちは岩倉使節団のことはもう習いましたか。木戸孝允も大久保利通も伊藤博文も初めて富めるアメリカをその目で見るわけですね。江戸で留守番をして、この経験をしなかったのが西郷隆盛でした。大久保たちはアメリカという国は町人がお城に住んでいるというほどの衝撃を受けて帰ってきます。彼らの抱いた劣等感は筆舌に尽くしがたかったらと思います。近代化を急がないと大変なことになると心の底から思ったわけです。ですから日本に帰ってきて、征韓論を唱える西郷を見れば、何をバカなことをと思うのも当然でしょうね。何を呑気なことを言っているのだ、今はそれどころではないと。この焦燥感を西郷は理解できなかったと思います。そこから明治10年に西南戦争で維新が終結したと言っているでしょう。そして22年に大日本帝国憲法発布、27年に日清戦争、37年に日露戦争と信じられない怒涛の近代化と日本の命運をかけた大戦争を二度もしています。この間、あの頃の日本人はただ直向きに、疑うことなく、懸命に、日本の近代化のために一丸となったに違いないと思います。それにしてもこのスピードには驚かされますが、とにかく頑張っているうちに知らぬ間に近代化に成功していたわけですね。

懸命に何かに取り組んでいると気づけば何かが備わっている。これは国家レベルの話はむしろ稀でしょうが、個人レベルではよく目にします。動機が強い劣等感であろうと全く構わないわけで、「気がつけば知らぬ間に」自分に何らかの力がついていることがあります。この「気がつけば知らぬ間に」というのがいいですね。前にも紹介したかもしれませんが「花弄」という言葉が私は好きでね。これ、「かろう」と読むのですよ。「花弄香満衣（かろうこうまんい）」は『禅語入門』によると、干宝という人の「春山」の詩の一句「水を掬すれば月手に在り、花を弄すれば香衣に満つ（みずをきくすればつきてにあり、はなをろうすればかえにみつ）《掬すれば》は《きくすれば》、《掬う》は《すくう》、《衣》は《え》、全く漢字は難しいね」にあるとのこと。両手で水を掬いあげると、月影が掌の中にくっきりと宿り、花に見とれてもてあそんでいると、花のよい香りが衣服に深く染みこむという意味で、自己が水や花そのものになりきって一つになるということだという教えとされています。しかし私は、違う解釈をどこかで読んでいます。確か茶道の話で、お花見のおもてなしを懸命に勤めていたら、気がつくと自分の衣に花の香りが染みこんでいた、というもの。これ、いい話だと思いませんか。何かを懸命に行っているうちに、知らないうちに自分の身に何かが備わっているという解釈ですね。この、知らないうちにというのが大切だと私は思っています。なかなか成果が出ないことの方が人生には多いけれど、そんな時は「花弄」という言葉を思い出してごらん。

今週のおすすめ

・丸山 豊 『月白の道』（中公文庫）

中公文庫はこういう貴重な本を出すからいいですね。辞書によれば「月白（つきしろ）」とは月が出る時に空が明るくなり、白く見えることです。美しい言葉ですね。作者は大正四年（1915年）生まれの医者であり詩人でもある丸山豊。さて、このタイトルからどんな本だと思いますか。これ、戦争散文集なのです。私、久しぶりに感動しました。裏表紙には、1944年5月、最前線の北ビルマ・ミイトキーナに送られた著者を待ち受けていたのは、守備隊の全滅、そして雲南を経てチェンマイに至る泥だらけの敗退行だった…、とあります。極めて悲惨な状況を淡々と語る詩人の文章が、それゆえ余計にリアリティをもって迫ってきます。ミイトキーナはビルマ北部の県庁所在地で、昭和19年5月から8月まで「菊」隊と「龍」隊の将兵およそ40名が20倍の連合軍と戦った場所です。勝てる見込みのないところへ「死守せよ」との指令が水上源蔵司令官のもとに届きます。つまり玉砕せよということです。しかし水上は残り少なくなった部下たちに南進して生き延びよと指示を出し、命令を無視した責任をとって自決します。丸山はこの水上を心から尊敬しています。

昭和一桁生まれで、戦場に行くことなく戦後の混乱期を生きただけをもって「私は戦争を知っている」などと言う人がマスコミに出たりしますが、あれは錯覚ですね。こちらは本物だけあって、丸山とか山本七平とか実際に兵隊にとられて、外地で死ぬか生きるかの経験をした知識人の冷静な言葉は私たちに重く響いてきます。

BGMは NIKI の *Every Summertime* でした…。